R18
S
M
兵長的複數回転
エレン×ドMリヴァイ
ドSリヴァイ

ＳでもＭでも、
いいからお前の好みで
俺を食べやがれ。

MusakuiRadio&Kiyoshi
Attack on Titin
Elen*Levi

MusakuiRadio Book No.3

エレン幸せ本。

俺、兵長が好き過ぎて、
一人じゃ足りないです。
兵長的複数回転

漫画ストーリー＆小説：絢音マド
絵：きよし

怪我が

治ったあーーーッ!!

えっ何それ

エレンの血液からウィルスを取り出して弱体化させた後、皆に注入したんだよ！

リヴァイ
ああ…
これで君が命を落とす確率も減ったよ……リヴァイ

エレン
何だ
さっきのは
すいません
団長に
妬きました

俺の兵長に
触れて欲しく
なくて…
すみません

俺と
エルヴィンは
友人だ
抱き合うくらい
何度もやってる
お前が思うような
仲じゃない

……
そうで
しょうか
？
何が
言いたい？

—だってあんな顔
俺には一度も
見せたことがない

…馬鹿
兵長は、
…団長が
好きなんですか

…お前
何を
言ってる

人類が皆エルヴィンを好きなのは

当たり前のことだろう

ええええ!?

俺、団長に敵わなすぎる!!

おいエレン?

俺は兵長が好きだ兵長以外に一生恋しないすげえ愛してる!

でも俺は一度も兵長に好きなんて言われたことない

団長はあんなに兵長に信頼されて好き好き言われてるのに!!

羨ましい!

俺は団長にはやっぱり敵わないんだろうか

兵長は…ちゃんと俺のこと…好きなんだろうか…

パチ

あー可愛いなー
兵長超可愛い…

それにしても
昼寝しようなんて
言うの、兵長
珍しいよなー

まあ
休息日
くらい
兵長も
ゆっくり
したいの
かもな…

何この兵長挟み!!!
やめろ
!?
へ…兵長!?
あ あの…ええと
二人に…なってますけど
ん…
エレン…?
へ、兵長? 何を…
!

バサッ

早く俺を

ぺロ

…嬲りやがれ

…え？

突っ込め

犯せ

…ッ

ヌルッ

…あ

ぢゅん

ぐちゅっ

…酷くしろ…

ギッ
ギッ
ゴクッ
…兵長
カチャ
カチャ
いいんですか
そんなこと
言って
容赦
しませんよ
ギロッ
俺がどれだけ
兵長を
好きなのか
兵長に
思い知らせて
あげま
しょうか…

ザッ
ドッ
ぐはぼッ
そうだ
兵長なぜか
二人いるんだ…
ハァ…
ハァ
跪け
足を舐めろ
はっ
はい!?
ドッ
ドッ

綺麗に俺の足を舐めることが出来たら、
それがいい子に出来たらご褒美をやろう
今度は太腿を舐めさせてやる

俺の
ふるんっ
ここを舐めさせてやってもいい

な…何これ
兵長が分裂!?
し、しかも

S←
エレン
俺より先にイキやがったらお仕置きだぞ？

M←
ドS兵長とドM兵長！
選べない！どっちも超可愛い!!

エレン…
あっ
早くお前ので俺を犯せ…
痛くていいから滅茶苦茶にしろ…

わかりました

二人まとめて俺が可愛がります

あ…

ン…っ

ふ…ッ

あ

エレ…

ン

淫乱だ…

エレン…俺をもっと罵れ…

兵長…二人とも エッチですね 腰動いてますよ

あ…そうだ俺は

お前の欲情をもっと俺にぶつけろ…！

http://kiyo-ryo.jp-t-ryo.com

何を…
生意気なこと言ってやがる
こんなんじゃ
ン
あ…ッ
喘げねえだろ下手くそが…
ふ
喘ぎまくってるくせに…可愛いなあ…
ン
でかくなったぞ…
はい
兵長が可愛すぎて虐めたくなったので
可愛過ぎて興奮し過ぎて死にそうだ…
兵長好きだ
好き
あ…
ン
好きだ
好きです
…あ…ッ

兵長の一番奥で
俺の飲んで下さい…っ
はっ
はあっ
あ、エレ…
はっ
もっと俺を穢せ…ッ
お前の精液で
穢せ…
はっ
ああっ
あっ
はっ
はっ
はあっ
はっ
はあっ
とぷっ
はあっ
ぐっ
!
は

(S)兵長っ
おい
……誰が俺に触れていいと言った？
じゃあお願いします
こっちの兵長にも入れさせて
いいぞ
俺を気持ち良くさせてみろ
さっさとブツを出せ
あ……！

兵長
兵長もっと乱れて…
ン…まだだガキ
あっ
こんなんじゃ俺は満足しないぞ馬鹿が
はい
じゃあもっと
激しくしてあげます
エレン
この、変態…！
はい
変になりそうなくらい兵長好きです
ン
あ…
ああっ
あッ

兵長
腰、動いてますよ…
当然だ…！
主導権は俺にある
エレン
出せ…！
俺と一緒にイけ……ッ
命令だ…っ
はい
はい、兵長…
あッ
エレ…っ
ああ……ッッ!!

コンコンッ
!!
エレン今いいかい？
団長!?
ばっ
はいっ
い、今出ます！
バタバタ…
な
何ですかコレ

わあっ

君の巨人化ウィルスを皆に投与した際の副作用だ

まぁ想定通りだがね

ふ、副作用!?

そう

副作用は、『その人の中で一番強い感情や欲望が増幅される』状態だ

それ以外に支障はない。一時的なものだしね

心配はないが…

ウィルスによる治癒能力は驚異的な細胞増殖による。その増殖が感情にも左右するらしくてね…

私もつい一時間ほど前までひたすら作戦を練り続けていたよ

副作用が、一番強い感情の増幅……?

兵長もウィルスを打った筈だ

でも兵長は…

リヴァイが二人になったのは別の原因だがね

え!? 副作用じゃないんですか!?

君が巨人化して巨人のうなじから脱出すると君は一時的に二人になるだろう？巨人の君と人間の君だ

それと同じだよ

正直巨人化が起こると思わなかった他の皆は巨人化までは起こらず細胞が再生されただけだが

リヴァイは常人と比べて体質が特殊だからね骨密度も高いし異常なほど新陳代謝が活発だ恐らくそのせいだろう

ちょっと待って下さい団長

そう

君が見た二人のリヴァイのうち一人は巨人化したリヴァイだ

きょ、巨人化!? 兵長がですか!?

け、けど兵長巨人じゃなく人間サイズでしたよ!?

ああ1．6m級だね

巨人でもちっちゃい兵長！

何それ超可愛

つまり君が巨人化するのと同じように、彼の体は分裂したのではなく増えたのだよ

そして

巨人の蒸発速度は一定ではないことわかっている

…恐らくもうすぐ彼の片方は蒸発する筈だ

で、でも
兵長の片方が巨人としたら変です
兵長二人とも性器ありました！
そ
それに兵長変でした媚薬に冒されたみたいにいきなり俺に乗っかって
性器があったのは、増幅された欲望を満たすために必要だったからだろう
あ…
そして皆と同じように
リヴァイの中で一番強い感情が増幅されただから彼は君の前で乱れた
アルミンは知識欲ミカサは強くなりたいオルオさんは兵長みたくなりたくてハンジさんは研究…確かに皆一番強そうな感情だ
—なら
兵長の中で一番強い感情は
…俺に…？

巨人の兵長は
どちらで
人間の兵長は
どちらだったのだろう

いや

どちらでもいい

どちらの兵長も
兵長だった
恐らく二人とも

…本物だった

兵長
…正気に
戻りましたか

あ
シャワー
浴びたんだ

?

なぜ離れる?

あ
俺、汗掻いて
シャワー浴びて
ないので
…兵長嫌かなって

…嫌な訳がない

!!

じゃ

じゃあ

……

一つ教えて
おこう
エレン

リヴァイは
副作用を
知っている
皆もそうだよ

副作用を
理解した上で
自己判断で
ウィルスを
打ってるんだ
副作用が嫌な
人もいるからね

兵長
副作用、知ってたんですか
……
だから昼寝しようって言ったんですか
だから昼間から俺の腕の中で眠ったんですか
どんな副作用が起こるかわかってたから

つまり兵長は一番強い自分の感情を自覚してたんですよね
その…、…俺と…
もしかして、好きって台詞、……とか……？

……結局言えなかったがな
え？
何を…？
……
もしかしてもしかして

ぎゅっ
かはあぁっ

きゅうう
…痛いぞ
痛いの嫌いじゃないでしょう？
ちっ

一度しか言わないからよく聞け
!?
ぎゅむっ

「
」

ガばっ

兵長が一度しか言わないなら
俺が代わりに毎日言います

ちゅっ
兵長が…大好きです

兵長、実は俺、団長から真実を聞く前は
俺の気持ちが強すぎて兵長が2人になっちゃったのかと思ってたんです。
俺、…1人じゃ足りないくらい、兵長が好きだからです。
だから俺、これからも兵長が2人いるつもりで毎日たくさん言いますね。
…兵長のこと、大好きだって。
そして毎日2人分兵長のこと愛させて下さい。
2人分のキスと2人分の抱擁を、毎日兵長にあげます。

後日談　〜　幸せ記念日

――リヴァイってさあ。どうしてエレンが好きなの？

ハンジの台詞を思い出して、リヴァイは自室で小さく息を突く。

（……あんのクソ眼鏡）

――だってさー、エレンってリヴァイよりも年下で討伐数も多くなくて実績もなくて巨人で浚われてばっかりだよね。巨人を駆逐したい意志は凄いけどさ。私はエレンのそう言うとこ大好きだし、皆もそうだと思うけど。……リヴァイはエレンのどこが気に入ったの？　やっぱり恋をしてんの？

歯に衣を着せない友人は悪気なくストレートにそう訊いた。

リヴァイと長い付き合いである彼女が疑問に思うほど、リヴァイがエレンと付き合っているのは傍から見て不思議なのだろうか。

自問して、リヴァイは溜息を突く。

……不思議、なのかも知れない。

エレンと自分は倍以上も年が離れているし、彼はリヴァイの部下だ。巨人になれると言う特殊な事情以外は確かに単なる一介の兵士である。方や自分は人類最強と呼ばれる兵士だ。別に自ら望んでそうなった訳ではないが、リヴァイをよく知らぬ人々は「人類最強」の肩書きだけで勝手にリヴァイに希望を抱いたり夢を見たりしているらしい。……まあ、知ったことではないが。

ともかくハンジの台詞は大多数の人々の疑問を代表している可能性があると言うことである。実際、「兵長はどうしてエレンと付き合ってるんですか！」なんて意気込んで尋ねて来られた経験も複数回あった。

（だがな、ハンジ）

リヴァイは静かに考えた。

（お前も一度エレンに惚れられてみろ。……その理由がすぐにわかる）

＊＊＊

――エレンには、毎日抱かれている。彼は毎日リヴァイの部屋を訪れ、リヴァイを押し倒し裸に剥き、勃起した性器を容赦なく挿入して獣のように荒ぶり怒濤の勢いで貫いて揺さぶる。

そしてその後、大抵エレンはリヴァイをお姫様抱っこでシャワー室まで運び、リヴァイを綺麗にシャワーと石鹸で洗うと二人ベッドに戻って眠りにつくのだ。

それが二人の日課となっていた。

だが今日、リヴァイは珍しくエレンの部屋を訪れていた。特に理由がある訳ではない。ただエレンがリヴァイを部屋に誘ったから来ただけだ。

シャワー室を出て、そのままエレンの部屋に直行すると、地下のせいかリヴァイの部屋より涼しげな空気が二人を出迎えた。

夏だからちょうど良い。エレンはリヴァイの体を大切にベッドに横たえると、自分もリヴァイの横にころりと転がった。

エレンの腕が背中に廻り、ぎゅうぎゅうと抱き締められる。

「兵長、……好きです。可愛い、好きです、好きです」

囁きながらエレンがリヴァイの顔中に口付けを落として来る。いつもながらの告白に、リヴァイはこっそりと苦笑した。

（毎日、お前はそれだな）

エレンの一日は「兵長好きです」から始まる。「おはようございます」の次に必ずこの台詞が来て、そしてことあるごとに「兵長可愛い」「兵長好きです」「兵長にキスしたい」「傍にいるだけで抱き締めたくなります」「今兵長に見惚れてました」「抱き締めてもいいですか」……口説き文句のオンパレードだ。それはもう文字通り四六時中である。

ついでに言えば、これらの他にも「タオルどうぞ！」とか「重いものは俺が持ちます」とか甲斐甲斐しい台詞が加わるのだが、いずれにせよエレンは朝から晩まで

兵長兵長である。
（……よく、飽きないな）
呆れながらリヴァイは考えた。
だが、そんな台詞で幸せになってしまう自分も同じようなものかも知れない。
ふわ、とリヴァイはエレンの腕の中で欠伸を噛み殺す。今は何時だろうかと顔を上げると、エレンのベッドの横に貼ってあるカレンダーが目に入った。兵団で支給される、数字しか書かれていない質素なカレンダーである。
だがリヴァイは眉を顰めた。妙なことに気が付いたからだ。
「おいエレン。あれは何だ」
「？　はい？」
リヴァイの視線を追って、エレンも顔を上げる。カレンダーを見て、彼は不思議そうに首を傾げた。
「カレンダーがどうかしましたか？」
「どうも何も、……何だあれは」
同じ台詞を繰り返す。今日は七月の最後の日。月ごとのカレンダーは明日になったら一枚捲ることになる。エレンとは毎日夜を共にしているが、大抵リヴァイの部屋で二人眠ることが多いから、カレンダーになんて気付かなかった。
「何故、全ての日に印が付いている？」
そうなのだ。七月のカレンダー全ての日に丸が付いているのである。
何の印だろう。普通、赤丸とは何かの記念日に付ける印だ。だが毎日記念日と言うことはないだろうし……、ならば毎日行うものとは何だろう。
訓練？　だが訓練ごときで丸を付けるだろうか。単にその日が過ぎたから印を付けているだけだろうか？
しかし後者と仮定すると、矛盾する事象が存在する。
カレンダーの中で一日だけ、何故か輝かしく花丸が付いているのだ。
「え？　丸ですか？　花丸？」
尋ねるエレンはどこかうきうきしている。何だその反応、と訝しく彼を横目で眺めながらもリヴァイは言葉を重ねる。
「どちらもだ」
エレンが楽しそうに「はいッ」と尻尾を振った。
「えっと、まず花丸はー、兵長に好きって言われた記念日です！」
リヴァイたっぷりと沈黙してから盛大に眉を顰めた。
「……ああ！？」
エレンがにこにこしながら指折り数えながら続けた。
「他の丸も、ちょっとした記念日です。まず七月十四日が兵長に好きだって言われた日でー、そんで十五日は兵長が寝言で「エレン……」って言ってくれた日です！」
「っ、……！？　!!!」
「十六日は兵長が初めて俺と一緒に並んで歯を磨いてくれた日で、十七日は兵長が俺に寄り掛かって寝てくれた日。信頼の現れですよねっ。十八日は団長が俺のこと初めて「リヴァイの彼氏」って言ってくれた日で、十九日は……」
「も、もういいっ……」
「むぐ」
さすがに恥ずかしくなって、リヴァイは両手で彼の口を塞いで無理やり台詞を中断させた。
一緒に歯を磨いた日？　そんなもの当然覚えている筈がない。寝言でエレンを呼んだ日？　そんなものも記憶にはない。
（と言うか、……呼んだのか、俺……）
多少ずーんと落ち込んでから、リヴァイはハッとした。大きな懸念が頭を過ぎる。目の前の男を見上げて、リヴァイは恐る恐る尋ねた。
「……この部屋を、俺以外の誰かが訪れたことは……？」
エレンは笑顔で首肯した。
「何回もありますよー、ほら、兵団全体の訓練の時、皆この古城に来るじゃないで

すか。その時にアルミンとかミカサとかこの部屋に来てます。うんと、今まで五回くらいかな……？」

「……あれについて訊かれたことは」

あれとはもちろんカレンダーのことである。直視すら出来ず、リヴァイは親指でくいっとカレンダーを指した。エレンが超満面の笑みになる。

「あっ、二人とも何の丸か知ってるので！」

即答したエレンに、リヴァイはヒクリと顔を引き攣らせた。

「全部、……知っているだと……？」

「はい！　俺兵長とその日に何があったか二人についつい報告しちゃうんです。だから二人とも全部知ってます。……あ、ついでにジャンとコニーもサシャも二度来たかなー、あいつらにもカレンダーのこと訊かれたので話しておきました！」

「話して、……おいただと……？」

ごごごご、とどこからか轟音が響いた。エレンは「ん？」と首を捻るが、あまり気にしていないように笑顔に戻る。

「そうだそうだ、クリスタ達も一回来たなー」

「それで、貴様はそいつらにも喋ったと……？　俺がお前に何と言ったかとか、寝言で何と言ったかとか、全部」

「はい、全部喋りましたっっっ！　……ぶはぼッ！！」

こっくりと頷いたエレンの顔を目掛けてリヴァイは思い切り蹴り上げた。エレンの体が面白いくらいに吹っ飛んで、ベッドの横にずがんと落ちる。

「へ、兵長〜〜〜っ、何で！」

蹴られた頬を押さえながらエレンが涙目で訴える。リヴァイはエレンを上方から見下ろした。エレンを見下す機会など滅多にない。だから思う存分、見下した。

そしてフンと鼻を鳴らす。

「二度と喋りやがったら今度はここを蹴ってやるからな。容赦しねえぞ」

「あっ……」

ぐりぐりと彼の股間を足の裏で刺激してやると、リヴァイの足の下でむくむくと何かが元気になった。予想外、いや予想通りの反応にリヴァイは眉を寄せる。

「……何、でかくしてやがる」

「えっ、だって兵長が、あ……っ、あっ」

ぐりぐりと股間を刺激するだけでエレンの性器がむくむくと育った。別に今は彼を悦ばすつもりじゃない。リヴァイは呆れて足を離した。

「……お前、マゾか」

「えーと。兵長と付き合う以上ある程度マゾじゃないといけないと言うか……、あっ、でも状況によってはと言うか！」

懲りないエレンは少々前屈みになりながら立ち上がり、ベッドに戻ると、リヴァイの腕を引っ張ってリヴァイの体を腕の中に閉じ込めた。

勃起した彼の性器がリヴァイの腰に当たっている。だが彼も今はリヴァイを抱く気がないらしい。固く張り詰めた性器をリヴァイに押し付けながらも彼はリヴァイを襲おうとしなかった。ただリヴァイの髪を優しく撫で続ける。

「兵長がSならMになるし、兵長がMならSになります。俺、兵長と巨人の駆逐のために生きてるので、兵長のためなら何にでもなるんです。兵長のためなら俺、何でも出来ます」

「台詞は格好いいのに状況は格好悪いな。おっ勃てて言う台詞か」

「へへっ、でも一日一回兵長に蹴られないとちょっと物足りないかも知れません。だから今蹴られてちょっとスッキリしました」

やはりマゾか、この男。

呆れながら考えて、リヴァイは表情を和らげた。

……馬鹿馬鹿しい会話は嫌いではない。相手がエレンなら尚更だ。

巨人の駆逐と同列に並べられたのは少し不満があるが、エレンだから仕方がないとも思う。巨人を一掃することに情熱を傾ける彼のことも、嫌いじゃないからだ。

とにかく、とリヴァイは話を戻す。

「お前、……もしかして、全部覚えてるのか。俺と、……その日に何をしたのか」
エレンが微笑んで、リヴァイの額にちゅっとキスを落とす。
「はい。……全部」
「……」
心臓の奥が、じくりと火照った。エレンが付け加える。
「全部、……兵長との大切な思い出です。だから一生忘れない」
「並んで歯を磨いたなんて下らんことでもか？」
「全然下らなくないです。兵長との思い出は全部、大事です」
「……ふん」
顔が赤くなる前に、リヴァイはふいと顔を逸らした。
「馬鹿が」
「はい。馬鹿なくらい兵長が好きです」
「……馬鹿だな」
同じ台詞を繰り返す。視線を逸らしたままのリヴァイを、エレンがきゅっと後ろから抱き締めた。
彼がリヴァイの肩口に顔を埋め、くぐもった声で告げる。
「俺にとっては、……毎日が、兵長記念日なんです」
「……」
「毎日、兵長との大切な思いが詰まってます。だから俺、毎日が大切なんです。こんなに毎日毎日が宝物みたいに大切なの初めてで、……」
すうっと息を吸って、彼が告げた。
「……幸せです」
――リヴァイは、……自分の誕生日を知らない。
誕生日を祝えるような環境ではなかった。気が付けば自分は地下街でゴロついていて、誰かの何かを祝う習慣は自分にも他人にもなかった。
誕生日と言う概念すら、エルヴィンに拾われてから初めて知ったくらいだ。
日々は、退屈で鬱陶しいものだった。だから兵団に入った日も覚えていない。
ただリヴァイが覚えているのは、……兵団の奴らが亡くなった日だけだ。
彼らの命日だけは忘れるまいと思っている。誰が何年何月何日に亡くなったのか、それだけは全て完璧に記憶していた。
彼らの死を記憶することは彼らへの弔いでもあり彼らへの誓いでもあるからだ。
……だが、それらは記念日でも何でもない。リヴァイを静かな怒りへと駆り立てるだけの日だ。
記念日なんて、考えたことすらなかった。
「ガキだな、……エレン」
「うっ。そ、そりゃ俺はガキですけど……」
ぶつぶつと不満げに文句を言うエレンの腕の中で、リヴァイはこっそりと苦笑しながら彼に寄り添った。
「？　へ、兵長？」
エレンが顔を赤くしてリヴァイの顔を覗き込む。黙ったままでいると、エレンがリヴァイの体をきゅっと抱き締めた。心地良い体温の中で、リヴァイは考える。
記念日なんて、考えたことすらなかった。
そんな価値観、エレンに逢うまで知らなかった。
宝物とは、手にしているだけで幸せになれる物のことを言う。つまり毎日が宝物なら、……きっとその毎日は一つの単語に集束される。
――幸福。
この絶望の世界の中で眩しく光る、ただ一つの幸福だ。
「エレン……」
リヴァイは年下の青年を見上げ、彼に向かってそっと両手を伸ばす。
「はい？　……わっ、へ、兵長？」
リヴァイの唇が、エレンの唇に触れた。触れ合うだけのキスだったが、彼の唇はリヴァイよりも熱く、確かな熱をリヴァイに伝えて来た。焦点の合わぬほど間近に

ある彼の瞳が大きく見開かれたのがわかった。
そっと唇を離すと、真っ赤な顔のエレンが自分を見下ろしている。
「毎日、記念日にするんだろう？」
「は、はい……」
「――なら」
指先で彼の顎を掬い取ると、リヴァイは部下に命令した。
「なら、今日は初めて俺からお前にキスした記念日にしやがれ」
エレンがきょとんと目を見開く。そして、物凄い力でリヴァイを思い切り抱き締めた。
「はいっ！　兵長好きです！」
「……っ、痛いぞエレン、……う、うわっ」
抱き締められたまま体をくるりと回転させられて押し倒される。リヴァイの上にぎしりと乗って来たエレンが、リヴァイの髪を撫でながら告げた。
「俺、兵長との記念日ってネタ尽きないんです。毎日毎日兵長の小さな発見があって。だから俺、毎日兵長のこと好きになってるんです。毎日毎日、好きだって気持ちが膨らんでいくんです」
「……」
「毎日記念日で、毎日兵長に恋してるんです。……このまま兵長を好きになり続けたら俺の中、兵長だらけになりそうです」
（……そう言うことか）
彼が毎日毎回「好きです」と囁く理由がようやくわかったような気がした。
彼は戯れに告げていた訳ではないのだ。毎日リヴァイに恋をしているから、気持ちが毎日大きくなっているから、彼は素直に告げているだけなのだ。
（本当に……馬鹿だな）
こんなに馬鹿な人間はそうそういないだろう。呆れながらも嬉しい気持ちでリヴァイは体から力を抜いた。エレンがリヴァイの髪を撫で、頬や耳、唇にキスを落として来る。
リヴァイはエレンを挑発的な瞳で見上げた。
「じゃあ明日、浴室でお前の体を洗ってやる」
「え！」
嬉しそうな声でエレンが叫んだ。
「明後日、お前の髪を洗ってやる」
「えええ！」
「その次の日、お前の耳掃除をしてやる」
「ええええええええマジですかあああ！　兵長の耳掃除いい！」
「うるさいぞガキ」
彼の顎を目掛けて、ひゅっと拳を打ち込む。ガツンと景気の良い音がして、エレンがいててと顎を押さえた。
「痛いです！　……で、でも兵長にキスしたいっ」
「うるさい。殴られろ」
がつがつと拳を彼の顎や腹に打ち込む。痛みに顔を顰めつつ、笑ったエレンが無理やりリヴァイを抱き寄せた。
「痛い痛いっ、キスさせて兵長！　……んっ」
強引に腰を抱き寄せられ、唇を塞がれた。すぐにリヴァイの歯列を割って彼の舌が侵入して来る。口腔内をくちゅくちゅと探られて、頭の奥があっという間に火照った。抵抗していた腕は彼の手で封印されてリヴァイは体から力を抜く。
「ん、……っ、……ふ、……ッ」
抵抗を諦めたリヴァイの唇を貪りながら、エレンがリヴァイの肢体を舐めるように撫でた。手の平全体でリヴァイの肌を探り、体の輪郭を確かめるようにねっとりとした手付きで撫で回していく。
その淫らな手付きに煽られながら、リヴァイは甘やかな吐息を零した。

＊＊＊

「あ、ッ、……う、あ……っ、ちょ、……、い、いつまでやってる、エレン……っ」
「ん？　兵長が大好きなので」
しれっと答える男をリヴァイはぎろりと睨む。
「だ、だからって……ッ」
「あ。間違った。兵長を大好きなのはいつものことだった」
「〜〜っ」
結局何も言えなくなって、リヴァイは口を紡ぎながら喘ぐ体を必死に堪えた。
今、エレンはリヴァイの胸を舐めている。
エレンはセックスの始まりに必ずと言っていいほどリヴァイの全身を舐めるのだ。エレンいわく、リヴァイの体が大切過ぎて可愛過ぎるから、舌でリヴァイを味わって舐めたくて仕方ないのだと言う。
それはいい。いいのだ。……いいと言うか、結構嬉しいのだ。
問題は、今日――エレンがいつまで経ってもリヴァイの胸を舐め続けたままと言うことだ。胸を舐められ始めてから、もう三十分は経っているのではなかろうか。
「ッ、……ちょ、エレ、……あっ、……ン、あ……、いい加減に、しろ……！」
「嫌です。もっと舐めたい」
「……の馬鹿、……っ、あ……あ、……ッ」
愛撫に慣れた躯は感じたくなくても勝手に快楽を生み出していく。
くちゅくちゅと故意に湿った音を弾き出し、ちゅうっと吸い上げた後に舌でころころと捏ね、甘く噛み、吸い上げ、舌の腹で舐めしゃぶる。右を舐めながら左を指先で摘み、交互に乳首を味わい続けている。
「兵長の乳首、物凄く可愛いピンク色ですよね、……ぷっくりしてて、弾力があって、触れるとツンって勃つんです。……ほら、こんな風に」
「ッ、……じ、実況するな……！」

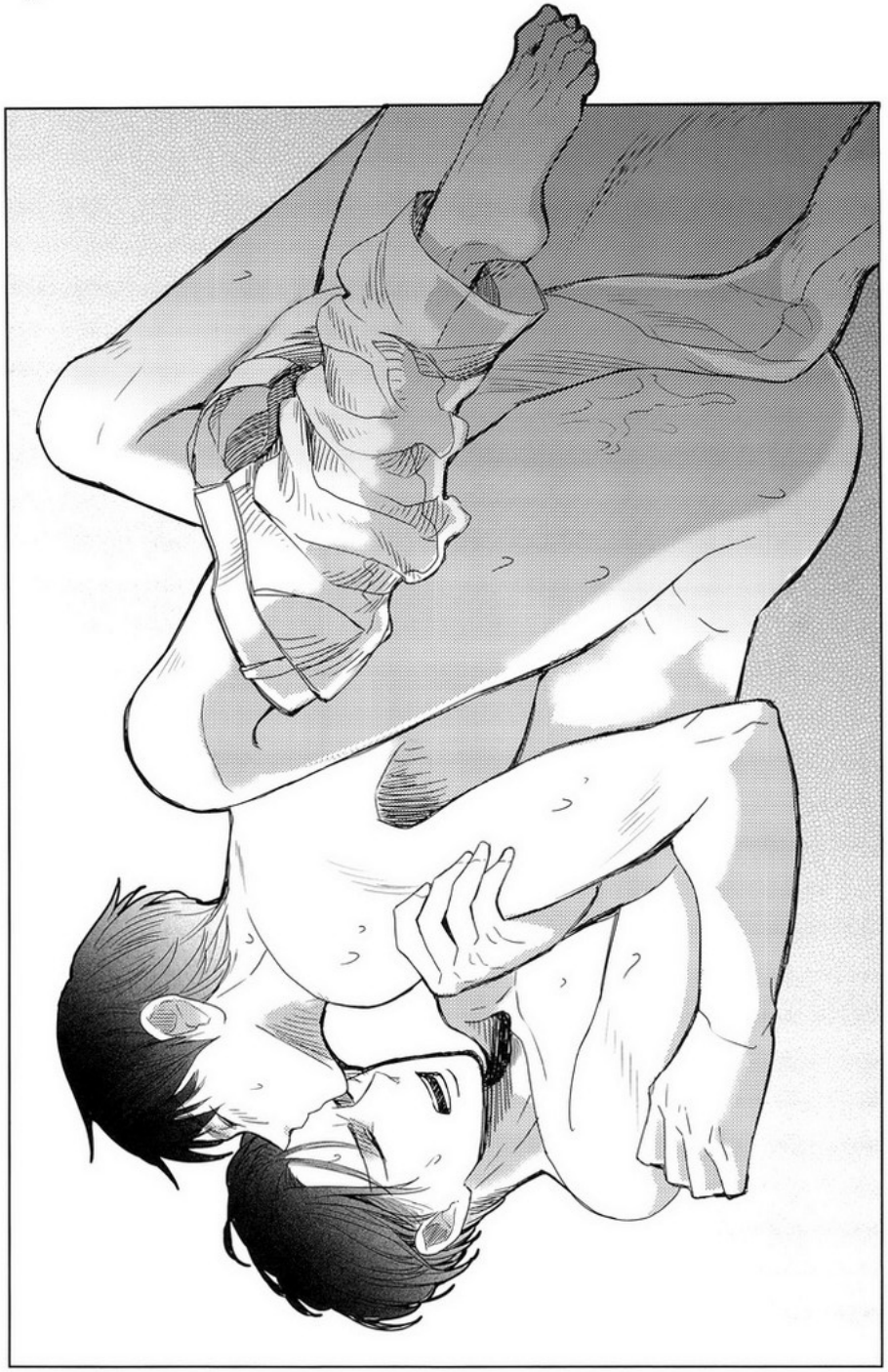
両腕で顔を覆いながら文句を言う。エレンは楽しそうにリヴァイの胸から顔を上げると、指先をリヴァイの股間へするりと滑らせた。彼の指先が器用にリヴァイの下着を下ろすと、既に屹立した性器が現れる。性器だけを取り出し服は半脱ぎのまま。エレンが指先でつつつと性器を撫でた。体の奥の疼きが増していく。
「とろとろですよ、兵長……。おかしいですね、俺、ここに触ってないのに」
「あ、あっ、……エレン、……貴様……ッ」
「兵長が悪いんですよ。とてつもなく可愛いこと言うから、兵長をもっともっと愛撫したくなったんです。だから兵長をたくさん舐めたくて、……俺の唾液で兵長を征服したくて」
「ふ、あ……っ」
体が勝手にひくひくと跳ねた。……有り得ない。台詞だけで感じてしまうなんて、本当に有り得ない。だがエレンの台詞に勝手に身悶える肢体を堪えることも出来ず、リヴァイは静かに唇を噛んだ。
……散々舐められたのは上半身だけで、性器も奥まった場所も舐められていない。焦らすにも程がある。
お陰でいつも男の熱塊を受け入れているそこは、刺激を待ってきゅうきゅうと収斂していた。エレンがその入り口を興奮した瞳で眺めながら、ゆっくりと顔を近付ける。
「兵長、……兵長の大切な部分も、……舐めたい……」
「ん、あッ、あ……」
エレンがリヴァイの太腿を高々と掲げ、股間にゆっくりと顔を埋めた。
「兵長……」
「あ……ッ、は、早く、……舐めろ、あ、あっ……！」
パジャマはまだリヴァイの足に引っ掛かったままだ。だがそれを脱ぐ余裕はなかった。早く彼の舌が欲しくて狂いそうだ。
くすりと笑ったエレンが、じゅぷッと大きな音と共に舌を挿入した。

「あッ、……あ、あああッ……！」
秘められた場所をがむしゃらな舌が犯して、リヴァイは堪らず体をくねらせた。エレンはリヴァイの孔へのキスと挿入と視姦を繰り返している。時折欲情を孕んだ瞳で眺めてから入り口に口付けを落とし、そのまま舌を挿入し、しばらくくちゅくちゅと舌の注挿を繰り返してから顔を離す。そして再び視姦から始まり、ぬちゃりと舌を注入する。
「あ、あっ、……ッ、うあ、……っ、え、エレ、……っ」
「兵長、もっと感じて……、可愛い兵長を、もっと可愛くしたい」
調子に乗った部下を涙目で睨む。だが、リヴァイの睨みなど物ともせず視線の合ったエレンが笑った。……このままエレンに主導権を握られてなるものかとリヴァイはびくびくと揺れる脚でエレンの頭を小突いた。
「そ、そこまで言うなら、……後ろだけで、ン、……ッ、俺を、イかせてみろ……！」
挑発されたエレンがぺろりと赤い舌で唇を舐めた。
「――はい」
獣のような愛撫が始まった。
エレンは親指と人差し指でリヴァイの中をぐっと押し広げると、舌先でじっくりと入り口を舐め上げた。次に唇全体でリヴァイの孔を覆いながら右や左に交互に舌を滑らせていく。孔に舌を半分挿入して左右上下に振った後にちゅうっと吸い上げる。……繰り返されるうち、ぞくぞくと重低音のような快楽が迫り上がった。
「あ、ああッ、……あ、あ……ッ、……っ、……エレ、……あ、……ッ！」
喘ぎが堪えきれない。蕩けた壁を目掛けて彼が指を三本一気に挿入し、リヴァイの中で三本をばらばらに動かし始めた。指の谷が皮膚に食い込むほどぐりぐりと奥深くを刺激しながらエレンは舌先を硬く尖らせてリヴァイの入り口をじゅぷぴちゅと突いている。
「あッ、あ、っ……！」
体内を掻き廻される感触に、喘ぎが零れる。愛撫の勢いで体がずり上がり、甘い高揚がリヴァイの中を支配していく。
リヴァイの様子に満足そうに笑ったエレンが、指先でリヴァイの最も感じる場所を突いた。
「あ、エレ、……ッ、ああ――――――ッ！」
喘ぎを堪えるのも忘れて、リヴァイは体をひくんひくんと大きく撓らせ、滅茶苦茶に首を振った。爆発的な快楽がリヴァイの背筋から脳へと流れ、腰が波打っていく。恍惚感すら伴う欲望に弄ばれて、淫らな熱の中に全身が溶けていく。
「あ、ああッ、……ン、あっ、……あ、ッ……！」
「兵長、気持ちいい……？」
ぐちゅ、ぐちっと容赦なくリヴァイの中を抉りながらエレンが囁く。リヴァイは自分の股間に吸い付いた部下を睨みながら答える。
「ど、どこがっ、気持ち良く、なんか……ッ」
だがその台詞が嘘だなんてエレンにはバレバレらしい。薄く笑った彼がリヴァイの中に埋め込んだ指をぐっと折り曲げながら囁いた。
「はい、兵長。……俺も……気持ちいい……」
エレンの声音には、まるで彼もリヴァイの中に挿入して快楽を味わっているかのような興奮が含まれていた。その欲情に、ぞくぞくと煽られてリヴァイは体をくねらせる。
「あ、ッ、……あ、っ……あ、……！」
焦燥感の混じった声でリヴァイは喘いだ。
もう駄目だ。指なんかじゃ足りない。彼の大きな性器でリヴァイの孔を埋めてくれないと満足なんか出来ない。むず痒い欲望にリヴァイは瞳を開けた。
年下の青年が、うっとりとリヴァイを舌と指で犯している。
翻弄されるだけなんて、冗談じゃない。
リヴァイだって、ちゃんとエレンのことを想っているのだ。想われるだけじゃ嫌だ。愛撫されるだけなんて冗談じゃない。一方的な愛撫なんて許さない。

気が遠くなりそうなほどの快感に体を跳ねさせながら、リヴァイはまだ服を着たままのエレンの股間に手を伸ばす。
「あっ、あ、……ッ、エレ、……っ、……早く、出せ……ッ」
エレンがリヴァイの台詞に気付き、後ろからずぷりと指を抜いた。
「兵長っ、兵長俺も、……もう我慢出来ない……ッ！」
余裕を無くしたエレンが忙しない動きでかちゃかちゃとジッパーを下ろし、性器を取り出した。途方もなく大きな男根が顔を現す。その太さに心臓をきゅうと締め付けられながらリヴァイはエレンを押し倒した。
「わっ、兵長、……ッ、……う、あ……ッ！」
我慢が出来なかった。まだ服を全て脱いですらいないのに、もう耐えられなかった。早くその大きなものでリヴァイを貫いて欲しかった。リヴァイは仰向けになったエレンの上に馬乗りになると、雄々しく天を向き、びきびきと筋張った性器を片手で掴んで自分の後ろに宛がう。
「はあ、ッ、……ン、……ッ！　あ、エレ、……ッ」
ゆっくりと、腰を下ろす。狭い肉を押し分けて、ずぶ、ずぶぶと男の性器がリヴァイの中に飲み込まれていく。
「あ、ああっ、……あっ……あ、あ……ッ」
ずぷっと言う卑猥な音と共に根本まで男の欲望を淫らに咥え込んで、リヴァイは首をうっとりと仰け反らせた。内臓を押し上げられるような圧迫感と征服感に、リヴァイは甘い吐息を漏らす。
「ン、……はあ、……ン、でけえ……」
堪らない。エレンの性器が大きく太いのが嬉しい。男の性器が自分を犯しているのが嬉しい。体の中いっぱいに興奮の証が埋め込まれているのが嬉しい。
「あ、あッ、……ふ、ン、でかくて、……いいぞ、お前の、……あ、ン、……ッ」
「兵長、……勃ってますよ……」
「……ンっ、……お前の、が……っ、熱い、からだ……、ン、あッ……」

興奮に濡れた瞳でリヴァイを観察するエレンの上で、リヴァイは踊り始めた。がむしゃらに腰を蠢かす。腰を下ろすとリヴァイの奥深くを彼の性器が届き、襞に当たって電撃のような快楽を生み出していく。腰を上げると彼の性器が肉壁を擦り上げ、身悶えるような熱を凝集させていく。
「兵長、……本当は俺、兵長の全身をちゃんと舐めたかったのに」
「う、うるさいっ、あ、……あッ……！」
切羽詰まった声を漏らすリヴァイに、エレンがくすりと苦笑する。
「そんなに俺のこれ、欲しかったんですか……？」
エレンが荒い息混じりに尋ねた。リヴァイは吐息で答える。
「ン、そうだ……っ、これが、これが欲しかった……っ」
「可愛い、兵長……。兵長が好き過ぎて、……俺、おかしくなりそう……」
エレンがリヴァイの腰を手の平で支えながら上体を起こした。騎乗位から座位に体勢が変わる。エレンがリヴァイの体を力強く抱き締めながら、赤くぷっくりと勃起した胸の花に吸い付いた。
「兵長、……どうされたいですか……？」
「ッ、……もっと、……もっと俺の中を、犯せ、……あっ、犯せ……ッ」
「こうですか……？」
エレンがリヴァイの腰を掴んで尻を目掛けて思い切り腰を打ち付けた。ぎちぎちと音がして、エレンの性器がリヴァイの奥深くまで突き刺さる。体内を満たす強烈で圧倒的な質量に、リヴァイは悶える。
「あ、ンッ、……あっ、　そうだ……っ、ン、そう、だ……！」
リヴァイの性器から、快楽の証拠のようにとぷとぷと蜜が零れていた。それはリヴァイの太腿を伝って結合部にまで達し、律動のたびにぐちゅッぐちゃっと卑猥な音を奏でている。
「あ、ああッ、エレ、……っ、俺のもっと奥深くに来い、……ッ、来いっ……」
「はい。……兵長のお願いなら、何でも叶えてあげます」

生意気な台詞を吐いた彼が滅茶苦茶な律動を始めた。
「あ、あッ、エレ、……ッ、……っ、エレ、エレン……！」
切迫した声が喉から勝手に飛び出した。
リヴァイの中に埋め込まれた昂ぶりが硬度と大きさを増し、更なる力強さでリヴァイの中を嬲り始める。
疼痛を伴うほどの悦楽が胸を喘がせ、リヴァイは身悶えた。ぐつぐつに煮詰められた快楽が爆発する時を待って沸騰し続けている。
「兵長、兵長、……っ、兵長可愛い、兵長、もっと乱れて、兵長……ッ！」
エレンの声も徐々に余裕を無くしていく。その事実がリヴァイの興奮を容赦なく煽った。腰が浮き上がるほどの快楽が体の中を駆け巡り、過度の快楽にリヴァイは滅茶苦茶に首を振り、エレンの頭を抱き込んで柔らかい髪の毛を掻き乱した。
「あ、あっ、……エレ、……ッ、……！」
エレンがリヴァイの耳に優しくキスを落とし、囁いた。
「兵長、……愛してます……」
「！　……あ、ッ……っ、……ッ!!!」
絶頂は、突然訪れた。思考が真っ白に染まり、強烈な快楽の中に身を堕とされながらリヴァイはがくがくと痙攣する。
「兵長、……く、……ッ！」
リヴァイの奥深くで精が叩き付けられたのを感じて、リヴァイは息を詰めた。エレンはぐるりと腰を廻して全てをリヴァイの中に出し切ると、瞳を開けてリヴァイの頬を撫でた。
「兵長、……」
「まだ、……でかいままだぞ、エレン」
呆れた眼差しで恋人を見やる。十五歳に似合わぬ表情で、エレンが男臭く笑った。
「はい。兵長を前にして萎える筈がない……」
「……仕方のない奴だな、……じゃあ、もっと貪ればいい……」
「はい……」
頷いて、エレンは繋がったままリヴァイをベッドに押し倒すと正常位でリヴァイを犯し始めた。全く萎えていない性器でエレンがリヴァイの中を再び力強く犯し始める。
「はあッ、……あ、……う、あ……っ、……ッ、……あ、……ッ！」
最初はゆっくり味わうようだった律動は、すぐに激しいものに変化した。先程リヴァイの中に放埒した彼の精液が、性器が入るたびに溢れ、ぐちゅっぴちゃっと水音を弾き出し、二人の太腿とシーツを濡らしていく。その音にすら煽られる。
「あッ、……う、……ッ、……ン、あ……っ！」
「兵長、……兵長……っ」
乱れるリヴァイの肢体を満足げに眺めながら、エレンが赤い舌で唇をぺろりと舐める。その仕草は男臭く、将来は逞しい男になるだろうと想像してしまう。
「あ、はあッ、……もっと揺さぶれ、……ンッ、もっと、……奥だ……！」
「はい……」
ぐちっ、ぐちゅっと狭い入り口を広げるように彼の昂ぶりがリヴァイの中を抉っていく。一度達した筈なのに、リヴァイの性器の先端からは蜜が止め処なく零れ、ぽたぽたと溢れていた。……止まらない。性欲も、エレンへの独占欲も止まらない。
貪れば貪るほど欲しくなる。
満たされれば満たされるほど足りなくなる。
「あ、……ッ、……っ、……ン、あッ、エレ、……ッ」
がくがくと体が勝手に痙攣し、エレンの名前すらまともに紡げない。エレンがそれに気が付いて、ぐちっぐちゅっとリヴァイの中を逞しく抉りながら手を伸ばした。
優しい手の平がリヴァイの頬を撫でる。
「兵長、……どうしたらもっと幸せになりますか？」
「……っ」
「俺、兵長を気持ち良くだけじゃなくて、もっと、……幸せにしたいです。……兵



長が心から幸せになる力になりたい。……俺、巨人になれるから兵長の荷物を背負える唯一の人間だと思うし」

エレンが必死に言葉を紡いだ。

「俺、兵長よりもかなり年下だし、まだ全然何も出来ないし、団長にも兵長にもハンジさんにも敵わないことだらけだけど、でも」

エレンの指先が何度も何度も宝物のようにリヴァイの頬を撫でていく。

「兵長を世界で一番幸せにしたい気持ちだけは、……誰にも負けません」

優しい台詞に、リヴァイは内心苦笑した。

(馬鹿だな、……エレン)

これ以上幸せになったら――体が千切れてしまう。

これほどリヴァイを愛する馬鹿なんてエレン以外にはいない。

……十分だ。これだけ爆発的な気持ちでリヴァイを愛してくれるだけで十分だ。毎日が兵長記念日だと言って笑うだけで十分だ。

「……ッ、エレ、ン……っ」

リヴァイはエレンに向かって手を伸ばした。エレンがリヴァイの手を優しく握り取り、頬に当てて囁く。

「はい。兵長……」

リヴァイの手を包み込む手はどこまでも優しい。だがリヴァイの奥を貪る腰の動きは猛獣のそれで、そのギャップに心臓が熱く火照る。

「……じゃあ、お前の、……ッ、俺の中に、……ぶちまけろ……!」

それだけで、リヴァイは幸福になる。頷いたエレンが笑った。

「はい。……たくさん、ぶちまけてあげます」

エレンが律動の速度を上げる。沸き上がる喜悦に、リヴァイは瞳を瞑り、体をくねらせた。全身が快楽に塗り替えられ、強烈な刺激がリヴァイの奥を支配する。

「あッ、あ、……っ、……――――――ッ!」

声にならない声を上げてリヴァイは喘いだ。エレンが滅茶苦茶に腰を打ち付け続け、リヴァイの最奥を勢い良く暴き立てていく。

「兵長、兵長……ッ、兵長、兵長、……ッ!!」

自分を呼ぶエレンの声すら快楽を煽る。腰から下が蕩けたようにどろどろになり、意識が灼き切れそうになる。彼のとてつもなく大きな熱棒がぬかるんだ肉壁を抉り、灼熱の快楽を生み出していく。

「あ、エレン、エレ、……ッ、エレン、……ッ、あ、イク、……イク……ッ」

限界を訴える声にエレンが男っぽく微笑んで手を伸ばし、汗ばんだリヴァイの手をきゅっと握り締めた。指先と指先を絡めて、もう二度と離さないかのように力強く握り締めて来る。リヴァイは顔を歪めた。

「見ろ、エレ、……っ、俺がイクところ、……見ろ、見ろ……ッ!」

視線でも犯して欲しかった。エレンの全てで犯して欲しい。嬲って欲しい。

そしてエレンの性器でこんなに乱れているのだと知って欲しい。

「はい。見てます兵長っ、凄く可愛い、……俺の前でイって、……全部、出して」

告げたエレンが凄まじい速度でグラインドを開始した。強烈な快楽が凝縮され、溜め込んだ熱が一気にリヴァイの背筋から脳天へと突き抜けた。

「あ、ああッ、……ッ、エレン、エレ……ッ、あ――――――――ッ!!!」

がくがくと体を大きく悶えさせながらリヴァイの性器の先端からぴゅっぴゅっと白い蜜が飛び散った直後、リヴァイの中に熱い液体がぶちまけられたのを感じて、リヴァイはうっとりと瞳を閉じた。

「兵長、……可愛い、……兵長、俺のも全部飲んで、……ん、……んっ」

最後の一滴までリヴァイの中に放埒しながらエレンが囁いた。

「あ、ン、……あ……っ」

上体を折り、繋がったままのエレンがリヴァイの体を抱き締める。汗ばんだ肌がぴったりと密着して、彼の熱い体温がリヴァイの体を優しく包み込んだ。

精液を中出しされるのは嫌いではない。汗ばんだ肌も好きだ。

自分を潔癖症だと言う人間もいるが、人間が生きている証は好きだ。それがエレ

ンのものならば、尚更だ。
「はあっ、はあ、……は、……っ」
「兵長……」
ベッドの上で抱き合うと、汗ばんだエレンの指先がリヴァイの髪を掻き上げた。
エレンがリヴァイに視線を合わせて来る。
「あの。兵長は俺のどこが好きなんですか」
「……ああ!?」
唐突な問いに思い切り眉を顰めたリヴァイを見て、エレンがぽりぽりと頬を掻く。
「実はたまに言われるんです。兵長はエレンのどこが好きなんだって。俺年下だし立体機動もいまいちだし若造だし威厳もないって。失礼ですよね！　いえ、それだけ兵長が凄い人で、皆に好かれてるんだってことはわかるんですけど」
なるほどな、とリヴァイは苦笑した。普通は尋ねないようなことも真っ直ぐに訊くところがエレンらしい。
「俺は兵長を離す気なんかないけど、……一応訊いておこうと思って」
「ほう。……だから訊いたと」
「はいっ、兵長俺のどこが好きですか!?　ぐはぼッ」
長い脚を高々と持ち上げて彼の脇腹を蹴ると、エレンがベッドの下に転がり落ちた。顔をぶつけたらしい。顔を押さえながらエレンが文句を言う。
「兵長、何でーっ」
（言えるか馬鹿）
むっつりと考える。こう言うストレート馬鹿野郎に伝えるにはどうすればいいだろう。リヴァイはゆっくり考えながら、ベッドの上に戻って来てしおしおとリヴァイを抱き締める彼の顎を、ひょいと指先で掬った。
「エレン貴様。毎日が俺の記念日だと言ったな」
エレンはぱちりと瞬きをしてこっくりと頷いた。
「はい。それが……？」
「もしもそれが何年も続いて、……そうだな、五十年くらい経ったら」
エレンが興味惹かれたようにリヴァイを見返す。
「そうしたら、……今のお前の問いに、答えてやる」
エレンが目を見開いて、それから柔らかく表情を崩した。
「じゃあそのために、頑張って生き延びて、長生きしなきゃいけないですね」
「巨人を駆逐しないと五十年後はなさそうだな」
「もちろんですよ、絶対に駆逐してやります！　俺と兵長のタッグで完璧です！」
「生意気言うな。俺とお前の功績は千対一くらいだ」
「ううう……反論出来ない……」
肩を落とす彼に、リヴァイは小さく苦笑する。
「だが毎日が記念日で楽しかったら長生きもあっという間だろう」
エレンが笑顔に戻る。
「そうですね。……兵長好きです」
「ああ、もっと言え。……ン……」
今日は、自分にとって記念日になるかも知れない。
——幸せ記念日だ。
「兵長好きです、好きだ、好きです、好き……」
リヴァイの顔中にキスを落としながらエレンが囁いている。
（ハンジ、お前は俺に尋ねたな。エレンのどこが好きかと）
リヴァイは脳内で長年の友人に語り掛ける。
（答えてやろう。こいつに惚れられればわかる。こんなに馬鹿で、こんなに真っ直ぐで、こんな激情を向けられてみろ。……こいつに惚れない訳がない）
それが答えだ。
——だが、そんなことは誰にも教えてやらない。
エレンの魅力なんて、リヴァイだけが知っていればいい。
考えて、リヴァイはエレンの腕の中で丸まった。

了

MusakuiRadio & Kiyoshi Presents

Attack on Titan
Elen*Levi

Comic Story&Novels:絢音マド（無作為ラヂオ）
pixiv:2922516
http://musakuiradio.com

Illustration : きよし
pixiv:1004655

Thanks :上野印刷様
Date :2013.7.14